

し え ん 便 い

みくまの支援学校支援部

梅の花もほころび一雨ごとに春の息吹を感じられる季節になりました。

いつも本校のセンター的機能を活用いただきありがとうございます。

令和4年度のセンター的機能活用状況を報告させていただきます。(令和5年1月13日現在)

- ① 教育相談件数 総数29件50回
- ② 巡回相談件数 総数36件
- ③ きこえとことば・見えかた教育相談
きこえとことば 13件 見え方 9件
- ④ みくまの支援学校特別支援教育Co等連絡協議会
「幼児期から学齢期の発達の道筋について」河原京子氏
参加申し込み… 80名 動画視聴回数… 131回



○各種アンケートより以下のようなコメントをいただきました。



・長い期間悩んでいたことを的確に言語化していただき、安心することが出来ました。自分の指導や支援の仕方に日々迷いを感じながら過ぎていく中で先生方に話を聞いていただき、アドバイスをいただけたことは、私自身が安心し明日からの活力になりました。(巡回相談アンケートより)

- ・「子ども達が発達の主人公として豊かに歩いていくために、発達の理解と支援のまなざしをしっかりと子どもたちに注いでいく」という言葉が印象的でした。
- ・子ども自身が「〇〇さんかっこいいから私もやってみたい」「お友だちが楽しそうだからチャレンジしてみる」といった気持ちを育むために、憧れの存在、または周りを真似してチャレンジする機会をたくさん作ってあげたいと感じました。(特別支援教育Co等連絡協議会アンケートより)

さまざまな相談活動での話し合いやCo等連絡協議会の開催を通して、子どもの視点に立った理論や素敵な実践を学び合うことができました。次年度は本校は施設改修が予定されています。センター的機能の役割も本年度と少し違った形になると思いますが今後ともご活用いただけますようよろしくお願いいたします。

相談窓口の紹介 Tel.0735-31-6101

「A君と先生達の活動～みくまの支援学校の実践より」

A君は一言でいうととても元気で暴れん坊な男の子でした。



「ぼく」4歳

大袈裟ではなく、その子が2・3歩動けば、だれかがけがをするというぐらいのヤンチャな子。私たちはA君の入学に向けて、集団で討議をしました。クラスの担任は足の速い先生がいい、体力のある人がいい等々さまざまな意見が出された長い話し合いの結果、最終的に私たちが確認し合ったことは、A君の行動に対して決して「だめ」「いけない」等の否定言は使わないこと。まずA君の行動を受け止めることから始めようということでした。

A君との毎日、先生達はいつも走っていました。A君が友達に手を出しそうになったら、間にスッと入り目線をぐらかすのに必死でした。それでも先生はいつも笑顔でした。

入学から3週間、そんな日が続いていたある日、A君のことをよく知っている方から、「教育ってすばらしいねー」と声を掛けられました。「えーなんで」ときくと「A君が入学してすぐやのに目が変わっている。穏やかになっている。」と話しました。毎日見ている私たちは、何も変わっていないように思いましたが・・・

それから元氣あふれる彼でしたが、小学部高学年ぐらいになると少しずつ落ち着いてきたように思いました。



「ぼく」5歳

それから月日を重ね、新宮市のお燈祭りの夜、青年になったA君に会いました。祭りに参加して山から下りてきたA君が言いました。

「先生ぼくね、今日は、けがせんようにゆっくりおりてきたんよ」「そうなんやー」「もうじき〇〇の試合あるからねー。けがしたくないんよ」「そうなんや」と話をしているととても感慨深い気持ちになりました。現在市内のB型作業所に通うA君は、仕事と好きなスポーツに励む素敵な青年になっています。

私たちは、子どもの「困った行動」に対し、頭ごなしに怒ったり、「〇〇しないと遠足行けないよ」など交換条件を提示して子どもたちに「やってほしい」行動を迫ることはないか。しかしそれは本当のこどもの力になるのだろうか？怒ってやらせる、交換条件で迫ることは、子どもたちから自分の気持ちを表明する機会を奪うことになるのではないか、自分の考えより大人の顔色を伺うことが優先されるようにならないか。自己を押さえ込み他者に合わせる—その習慣化は時間を経て二次的な障がいを発現させることにつながるのか・・・。

当時、彼を否定せず、押さえ込まず、「自分からやろうと思う気持ち」を大事に育てた先生方の思い、熱意、団結力はそのような熱い議論の上に築かれたものでした。

発達の研究を生涯続けてらっしゃるある先輩先生は機会ある度に「叱ってやらずのはだれでもできることで素人がすること。叱らずにこどもが自分から動こう、やろうと思わせるように工夫するのが教師の仕事ですよ。」とよく職員に話されてました。

障がいのある子どもさんは、放課後友だちと遊ぶことが難しく、家と学校の往復だけの単調な生活になっているケースもみられます。どうか学校では、子どもたちには集団の中で、自分の思いを素直に出して、心も体も動かし、時に友だちとぶつかり合いながらも自己を否定されず、押さえ込まれず、伸びやかに成長して欲しい。

また当時の実践より教師は集団の団結力と、教育的工夫のもと、より良くなろうとする子どもたちの内面をいつも応援するものでありたいと思いました。



Co川上

Kawakami.